

## 編集後記

|     |   |
|-----|---|
| 雑誌名 | 真実心   |
| 号   | 40  |
| ページ | 173   |
| 発行年 | 2019-03-10  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1108/00000906/">http://id.nii.ac.jp/1108/00000906/</a> |

## 編集後記

『眞實心』第四〇集をお届けします。平成三〇年度も五回の宗教講座を開催させていただきました。聴講いただきました皆様に感謝申し上げます。また、今年度のすべての宗教講座の講演を講話録としてここにまとめることができました。講師の先生方には、ご講演のみならず、講話録の校正をしていただきましたこと、衷心より御礼申し上げます。ここで改めて、各ご講演からの学びを振り返ります。

五月には、大谷大学教授であられる東館紹見先生に「生死の苦海・功德の宝海―東日本大震災から問われる私たちの姿―」というご講題でお話しをしていただきました。先生は大谷大学で日本仏教史を研究される一方で、岩手県宮古市にある善林寺のお坊さんでもあります。善林寺は、二〇一一年の東日本大震災の折に避難所ともなりました。ご講演では、震災の四日後に宮古市に戻られ、そのまま半年間大学を休職された間に被災地で経験され、学ばれたことをお話しいただきました。東日本大震災は、地震、津波、福島原発事

故と、神も仏もいないとも思えるような現実をわたしたちに突きつけました。ご講演では、その経験によって、自分に都合のいいことだけを求めようとすゝる「ものさし」が破られ、破られたからこそ本当に大事なことに気づいていったことを「逆縁」という言葉でお話してくださいました。震災が引き起こした悲劇、苦悩の傷ははまだ癒えることを知りません。この生死苦海を超えていくのは、被災された地域の方たちだけでなく、わたしたち一人ひとりが、自分たちの自己中心的なあり方を見直していく必要があるということをしゝて、そのことをわたしたちに教えてくれるのが、仏教や宗教であることを学びました。

六月には、京都市の副市長で、本学の客員教授でもある村上圭子先生においでいただき、「京都市役所で働いて、わたしが学んだこと」というご講題でお話いただきました。京都市民の生き方として「めきき、たくみ、しまつ、もてなし、きわめ、こころみ」という六つのキーワードを挙げて、京都という町の特性を説明してくださいました。そのひとつひとつが京都の長い歴史の中で育まれてきたもので、今の京都らしさを作っていることを学びました。四〇年前に掲げられた京都の都市理念「世界文化自由都市宣言」は、まさにこの京都のあり方に基づいて、世界各地の人々との文化の交流と、それを可能とする平

和の実現を意図したものであることを知り、その京都で生活をする者として身が引き締まる思いがしました。また、京都市の職員として働いてこられた中での学びについてもお話しいただきました。特に大事にしたこととして、人権問題を挙げられたのが印象的でした。わたしたちは、気がつく自分と似たような属性の人で固まってしまい、違う人という違和感を覚えます。また、つつい誰かと自分を比べて、優劣や高低を決めつけようとしてしまいます（これが、東館先生がお話しになられた「自分のものさし」というものです）。人権に関わる問題の多くはこのようなところから生じていることをご指摘いただきました。自分とは違う人をリスpektできる人になること、そして、自分と人を比べるのではなく、昨日の自分と今日の自分を比べるようになるということを教えてくださいたいのは、学生たちにとって学びとなったことと思います。

十月には、延命寺住職の徳永道隆先生から「今を生きる―悲しみという光―」というご講題でお話をいただきました。先生は、広島県の延命寺の住職として法務を務める傍ら、病院でのビハーラ活動や、女子少年院での教戒師をされています。「ビハーラ」とはインドの古典語で、漢字では「精舎」や「寺」と翻訳されてきました。近年では、病院や福祉施設、在宅で支援を求める方を孤独に置き去りにすることがないように、僧侶の立場で、

医療者や福祉支援者のチームに加わり、その苦悩を少しでも和らげようとする活動の名称として用いられています。ご講演では、そのような活動の中で出会われた方との対話を紹介してくださり、その中で見出された人のあり方を示してくださいました。苦しみの中にあって、人はしばしば「なぜ自分だけが」と悩み、生きる意味や価値を見失います。しかし、その苦しみの底、絶望の暗闇の中にあってもなお、人や言葉との出会いによって、人は自己中心的な自分を振り返り、そのことによって逆に、今を生きる感動や命の尊さに気づくことができるようです。東館先生の講演にもつながるお話でした。

十一月には、「いのちの花を咲かせよう」というご講題で、真宗大谷派僧侶である鈴木君代先生においでいただきました。鈴木先生は、シンガーソングライターとしても活躍しておられ、ご講演ではギターの弾き語りを交えてお話ししてくださいました。「とてつもなく自己肯定感が低い」と自称される先生が、率直に幼少期のことや亡くなられた友人のお話しをしてくださり、学生たちがひきつけられていく様子が講堂の後ろからでも伝わってきました。幼少期の家庭環境から来る喪失感や不安に悩み苦しみながらも、「苦しみや悩みをなくしてくれるのが宗教なのではない、むしろその苦しみや悩みがほかの誰とも違う自分の人生を歩ませてくれる、そのことを教えてくれるのが宗教なんだ」と教えてく

ださる先生との出会いを通して、悩みながら傷つきながらも、誠実に人生に向き合い、人とともに生きる世界を求め続ける姿が、学生たちを励ましているように感じられました。現代はネガティブな感情をポジティブに変えることを是とする風潮が強いように感じますが、ネガをポジに変えるのではなく、苦しみや悲しみに向き合う、その向き合い方を教えてくれたり、向き合う体力をつけてくれるのが、仏教をはじめとする宗教の力なのかもしれません。そして、そのためには出会いが欠かせないのだと学びました。

十二月には、真宗大谷派僧侶であり、真宗大谷派宗務所教育部部長の速水馨先生に「これからの寺院の可能性―人をつなぐ根室のプロジェクト―」というご講題のもと、お話しをうかがいました。東本願寺には、中央同朋会議というこれからの浄土真宗をどう考えていけばいいかを話し合う会議があるそうです。浄土真宗に限らず、今の日本社会の中で仏教やお寺に何ができるか。そもそも生き残ることができるのか。多くの方はそこにあまり明るい未来を見出さないことでしょう。速水先生たちにもそのような危機感があったのでしょうか、二〇一四年に開催されたその会議では、山崎亮さんというコミュニティデザイナーを手掛ける方に基調講演をお願いされたそうです。そこで示されたのは、「寺を地域に開く」というのではなく、寺がまちに出て地域の方が何を求めているか、何をやりたいと

思っているのかを知り、それを一緒に取り組んでいくことが必要だと示されたそうです。ご講演では、山崎さんの提案を実現した「根室ジーンプロジェクト」を詳しく紹介してくださいました。そのプロジェクトを通して、プロジェクトチームが出会ったのは、少子高齢化を迎え、大きな産業もない地域でありながらも、その地域で生き続け生涯を終えていきたいという人々の思いでした。かつて、寺には教えがあり、儀礼があり、癒しやケア、そして勉強の場もありました。しかし、今はその多くが寺の外に出ていって、教えと儀礼だけが残り残りました。しかし、寺と根室のまちに豊かに残る「ありがとう、なんとかなる、ほっとする」を最大限に生かし、世代を超えた取り組みに、寺院のみならず、これからのわたしたちの社会の希望を見出す思いがしました。

以上、簡単ではありますが、五人の先生方のご講演をまとめさせていただきました。先生方のお話で共通している点は、「自分のものさしに気づく」ということでしょうか。わたしたちは知らぬ間に自分の基準で人を測り、自分を測っています。そして、それによって人を傷つけ、自分自身をも傷つけてしまっているようです。生きづらさ、行き詰まりというのは、そういうところから出てくるのでしょうか。しかし、先生方のお話からうか

がえるのは、そのような「生きづらさ」「行き詰まり」自体が悪いということではなく、「生きづらさ」「行き詰まり」に出会ったときに、「自分のものさし」をいったん手放してみること、そして手放してみること、開ける世界があるということだと思えます。みなさんが行き詰まりに出会ったとき、今回の先生方のお話しを、そして仏教の存在を思い出してくださいたら、望外の喜びであります。

ここでのまとめはまったく不十分なものにすぎません。ぜひ直接に講話録を開いてくださって、先生方の言葉ひとつひとつに出会ってください。

(編集子)



二〇一九年三月一〇日発行

真実心 第四十集

非売品

発行所

京都光華女子大学  
京都光華女子大学短期大学部

〒615-0882 京都市右京区西京極葛野町38  
電話(〇七五)三二五三三三

印刷 協和印刷株式会社

〒615-0052 京都市右京区西院清水町13  
電話(〇七五)三二二四〇一〇